

荒木牧人作 **「二十歳のグラフィティー ヒノキは知っていた」**

<前編>

石塚敏子

(ナレーション) あれは、わたしが小学6年の時だった。それまでもよく父とケンカしていた母は、わたしたち兄弟2人と父を残して、家を出ていったのだ。わたしの名は石塚敏子。今は短大の2年生。父は都内のすし屋で板前をしている。母は、出て行って間もなく離婚届を送ってよこして、父とは正式に離婚し、今は別の男と暮らしている。話し上手で、夜は大勢のなじみ客を持つスナックのママをしているそう。

わたしの記憶では、両親のケンカは大抵お金絡みのことだった。締め屋の父と、金遣いの荒い母だから、ぶつかるのは当たり前とも言えた。ケンカが始まったからといって、だれも止めなかったのはそのせいだ。母がいなくなって最初の1年はいつも泣いていた。中学に入り、だんだん大人になりかけると、わたしの心の中には母への、そして母を家出させた父への憎しみがわき上がってきた。だが生活の面では、それほど困らなかった。父も兄もみんなバラバラだったので、自分の身の回りを考えていればよかったからだ。ただ、心の中がやけに寒寒としていて、生きていくことに何の喜びも意味も見つけられなかった。

わたしのマンションの隣には、木々に囲まれた公園がある。その真ん中には、シンボルのように1本のヒノキが立っていた。小学生のころ、父と母がケンカを始めると、わたしはよくそのヒノキのところへ行き、下のベンチから上を見上げ、生い茂る葉っぱに向かって、自分の胸の内を話し掛けていた。

敏子(小学5年)

ねえ、ヒノキさん。うちってどうしてバラバラなの？ 父さんも母さんもあんなに意地を張ってばかりいて。わたしは、あなたのように、大きな枝で覆ってくれる人が、守ってくれる人が欲しいのに…。

ナレーション

そんな時、わたしはいつも泣いていた。母が出ていった日もそうだった。わたしは泣きじゃくりながら、「母さんのバカバカ！」と叫んでいた。大きなヒノキは黙って何も言わない。でも風に揺れてかすかに立てるザワザワという音は、わたしと一緒に泣いてくれているようだった。あの日、わたしの中の何かが死んだ。そして8年の歳月が流れた—。

森本久美子

ねえ、とっち、とっちってば！

敏子

え？ 何、久美子？

久美子

どしたの？ さっきから黙り込んで。ねえ、次の講義、ばっくれちゃってどっか行かない？

敏子

ええ？ だって次、必修科目だよ。

久美子

いいじゃん。ノート、由香に取っておいてって言ったから。

敏子 由香に悪いよ。

久美子 いい、いい。大丈夫。行こ！

ナレーション 森本久美子は、中学時代からの親友で、短大までずっと一緒。わたしの家庭環境を知っている唯一の友達だ。

久美子 とっち。あのね、あたし…、彼氏できたんだ！

敏子 ほんと？ だれだれ？

久美子 え？ だってバイと先だからきっと知らないよ。

敏子 なあんだ。サークルのお目当ての先輩かと思った。

久美子 やだあ。いいのいないじゃん。あ、そうそう、1人いた。ちょっと変わったやつが。もしかしたら、とっちのこと好きかもしれないんだよ。

敏子 ウソー。だれそれ、名前は？

久美子 まえ…の、まえ…かわ、ううんとね、前…何とかっていうのよ。とにかくその子、絶対好きだよ。だってとっちを見ている時の目、全然違うもん。

敏子 何それ、怖いじゃん。

久美子 早くラブラブしてね、あたしみたいに。

敏子 はいはいはいはい。

ナレーション それまで男の人に「付き合ってくれ」なんて一度も言われたことなかったし、わたしのとっての恋愛の定義は「くだらないもの」ということだった。あの父と母が、猛烈な恋愛の末に駆け落ち同然で結婚したことを知っていたからだ。ところが、その彼と程なく付き合うことになった。

彼の名前は前田義也。すぐ隣の青春大学2年生で、年も同じ二十歳。彼はクリスチャンで、何でも同じクリスチャンの親が、聖書に出てくる人物の名前に、神様から「お前は正しい」と言われるように、「義也(ぎなり)」という漢字を当てて、「ヨシヤ」と名づけたんだって。何だか本人も荷が重いと思うんだけど…。当然ながら、日曜日は教会に行っていて、日曜日のデートは午後からだ。朝が苦手なわたしにとっては都合がいいけど。ことの起こりは、ある日、彼から1通の手紙が舞い込んだのだ。

久美子 うわあ、マジで来たんだ！ だからあたしが言ったでしょ。

敏子 ビックリだよー。しかも切手はってないってことは、直接うちに持ってきたってことですよ。変態だよ。

久美子 変態変態。ンで、「付き合え」みたいなこと書いてあったの？

敏子 ううん、文通しようみたいな内容。

久美子 うわあ、目と鼻のところにて文通！？

教授 (セキ払い)

久美子 す、すみません。(小声で)で、OKしたの？

敏子 一応…変事みたいなものは出したよ。住所書いてあったし。今度会えば？ 紹介

したげるよ。

久美子 顔知ってんの？

敏子 知らないよ。会ってないもん。ただ…。

久美子 ただ？

教授 (セキ払い)

ナレーション ただ、何か違っていた。ただもんじゃないっていうか、やっぱり変態というか、第一、わたしみたいな者に興味を持つこと自体がヘンなんだ。だってわたしって、兄ちゃんに言わせると、わたしの顔を見てる人のほうが人生イヤになるほど暗い顔してたから。でも彼は、そんなわたしの顔を一目見て、「これは絶対ほっとけない顔だ。僕が何とかしなければ、死んじゃう顔だ」って、使命感めいた直感がひらめいたんだって。

それから3日と置かず手紙が来た。聖書の言葉らしいものがいっぱい書いてあって、今にも歯の浮くような、でも何か不思議に心が休まるような、優しい言葉が連ねられていた。でもやっぱり「恋愛はくだらないもの」という思いがわたしの心を離れなかった。手紙でいくら優しいことを書いていても、裏の心がある。どうせ本気で思っていないことだって、手紙なら平気で書けちゃうんだ。恋愛ゲームに彼は酔いしれているだけなんだって。でも、もし彼の気持ちが本物なら、信じたい。心のすべてを打ち明けたいというかすかな願いもあった。

そんなある日、わたしはついに初デートをすることになった。日曜日の午後3時に、彼がいつも来る駅の改札口で待ち合わせた。

敏子モノローグ 遅—い。3時30分だよ。もう帰っちゃおうかな。

前田義也 (遠くからあ、石塚さ—ん！(息を切らしながら)よかった。ごめんね、待たてたでしょ？

敏子 うん、ちよつと。

義也 何分ぐらい？

敏子 30分、ぐらい。

義也 ごめんなさい！ 申し訳ない！ 初めてのデートなのに、とんでもないやつだね。

敏子 いいよ、もう。別に気にしてないからさ。

義也 ほんとにごめん。じゃ、行こうか。

ナレーション オーバーだけど、それはわたしにとって人生で初めてのデートだった。映画「レオン」を見てから、公園を散歩した二人とも無言だった。その間、わたしはずっとドキドキしていた。そして頭の中では、久美子が話してくれた彼氏との初めてのキスや、初体験のことばかりが、頭の中をよぎっていた。不意に彼は言った。

義也 僕は、手紙にも書いたように、クリスチャンなんだ。石塚さん、よかったら、君のこと、ご家族のこと、話してくれないかな。間違ってたら謝るけど、君が明るく明るく

振る舞ってても、何か心の中は、とても寂しいんじゃないかなって気がしてしょうがないんだ。

ナレーション とっさのことに、わたしは言葉が出なかった。「この人って怖い」と思うほど、わたしの心の奥を見抜いている。

敏子 あ、ありがとう。うん、この次ね。

ナレーション わたしは、小さい声でそう言うのがやっとだった。その夜、何か久しぶりに味わった暖かな気持ちで家に帰ると、待っていたのは酒臭い息でまた金の無心をする父だった。

石塚修三 正春、金持ってるか？

石塚正春 あるわけねえだろ。

修三 そうだよな。なあ、敏子。金 5 万だけ貸してくれよ。なあ。

敏子 そんなお金、ないよ。

修三 あるだろう、ほら、あのお前の貯金が。

敏子 あれは、あたしの学費だよ。今月納入しなきゃいけないんだから、絶対ダメだよ。

修三 なあ、頼むよ。じゃ 3 万、3 万だけでいいから。なあ敏子。

ナレーション 父に泣きつかれて、わたしはしぶしぶ、3 万円を下ろして渡した。母がいなくなつてから、父はまるで母の家出の原因のケチを改めるかのように、打って変わって金遣いが荒くなり、自分より下の板前たちとの中を保つため、仕事が終わるとしばしば彼らを連れて、飲みに出かけた。父に貸した学費貯金が帰ってこないことは分かっていたが、わたしは何としても短大をやめたくなかった。その夜も、風に揺れるヒノキの葉を見上げながら、わたしは何度も何度もあふれる涙をぬぐっていた。

敏子モノローグ どうしてこうなってしまったんだろう。なぜわたしだけが、こんなつらい目に遭わなければならないんだろう。こんな父のせいで、短大をやめて、せっかつかみかけた前田君との愛も捨てて、この先何を目当てに生きていけばいいのだろう。

敏子モノローグ 死んじゃおうかな。

ナレーション ふと、そう思った。もうこんなつらい生活は続けたくない。死んで、すべてのことから逃げ出したい。それは、まるで深い底なしの空間に引き込まれるような誘惑だった。見上げると、暗い空に、ヒノキの枝が一段と激しく揺れていた。

<後編>

敏子 死んじゃおうかな。

ナレーション ふと、そう思った。これで何もかも終わる。短くつらかった二十歳の青春。いつも心の中を寒い風が吹いていて、寂しくて、ひもじくて、愛を憎みながら、愛を必死で探していたわたし。

敏子モノローグ　　こんなわたしの心を知っているのは、ヒノキさん、あなただけ。わたしが死んでもだれも悲しんでくれないけど、あなたはわたしのために泣いてくれる？

ナレーション　　見下ろすように立っているヒノキを見上げると、止めどもなく涙があふれてきた。その時、くずかごからのぞいた、口が鋭く欠けた瓶が目にとまった。

敏子モノローグ　　ヒノキさん、さよなら。前田君、さよなら。短かったけど、あなたに出会えてよかった。ありがとう。

ナレーション　　破片を左手首に当てると、わたしは目を閉じて、右手に力を込めた。

ヒノキ　　(エコー)いいのかい？

ナレーション　　突然、胸の中にズシーンとした低い音が聞こえた。

ヒノキ　　(エコー)いいのかい、それで？

敏子　　…だれ？

ナレーション　　空耳…？ いや、確かにだれかがわたしに話し掛けた。真っ暗な公園を見回しても、人の気配はしない。耳を澄ましても、ヒノキの枝が静かに揺れる音のほかは、もう何も聞こえなかった。わたしは体中の力が抜けて、その場に座り込んだ。もう涙は出なかった。ただ無性に「生きていてよかった」と思った。その夜、家に戻って、あの不思議な声のことを考えていると、電話が鳴った。

(効果音)　　(電話の呼び出し音)

敏子　　はい、石塚です。

佐野波江(敏子の母) (フィルター音)(泣いている)敏子なの？

敏子　　お、…母さん？

波江　　(フィルター音)ごめんね、電話して。

敏子　　…酔ってるの？ 母さん。

波江　　(フィルター音)うん。あのね、敏子。…お金に困ってない？

ナレーション　　わたしはためらった。死のうとしたのも、直接の原因はお金が絡んでいたからだった。でも、今更自分を捨てていった人に頼めはしない。ううん、死んでも頼まない。

波江　　(フィルター音)母さんね、小さなスナックやってるんだけど、何とかうまくいっててね。もしよかったら、今度のおんたの成人式の振りそで、買ってあげたいんだけど。…(また泣き出す)母さん、敏子なら分かってもらえると思ったのよ。

敏子　　何のことよ。

ナレーション　　母は酔ってはいたが、「これだけは信じて」と前置きして、父と離婚した理由をゆっくりと話し始めた。わたしが3つになった時、母は次の子を身ごもった。でも父は、ちょうどそのころ、勤めていたすし屋のなじみの客だった女性と親しくなり、そのことを知った母からとがめられると、怒って身重の母を殴り倒し、母は流産してしまった。どうしても父を許せなかった母は、それから酔うと暴力を振るう父に、わたしたち子供2人のためにじっと耐えていたが、ついにはたまりかねて出

ていったという。

波江 (フィルター音) ありがとう。じゃあまたいつか。敏子、母さんを許してね。お父さん、ああいう人だから、お金に困ったらいつでも言ってね。

(効果音) (電話の切れる音)

ナレーション 結局、母もかわいそうな人なんだ。人を許すのは難しいけど、その人の事がそれなりに分かると、人を憎み続けるのは、もっと難しい。わたしは前田君のことを考えた。わたしが自殺しようとした夜に聞いた声は、ひょっとして、心の中の前田君が止めてくれたのかな、と思ったりもした。彼の考えること、言うことは、ほかの男たちとは違って。何か、次元の違いと言ってもよかった。どこがどうと言えないけど、真実味があって、何よりも一緒にいて心が安らいた。彼とならうまくやっていけると思う一方では、わたしは人を愛するのが怖かった。父や母のようにはなりたくないと思いつつ、彼の愛の中におぼれていく自分が怖かった。いつか裏切られるのが怖かった。でも…。わたしの心は揺れていた。そんなある日曜日の午後、わたしはいつもの駅の近くの公園で、前田君と会うと、思い切って聞いてみた。

敏子 ねえ、前田君。こんな根暗で何の取り柄もないわたしとどうして付き合う気になったの？ 体が目当てでないらしいのは分かったけど。

義也 ああ。僕の心の中で、いつも君はワンワン泣いているんだよ。泣きじゃくっているんだ。僕さ、そんな君を見るたびに胸がキューンと締め付けられて、君の心の中に入り込んで何とかしてあげたくなるんだ。

ナレーション オーバーだけど感動した。「やっぱり、この人なら分かってもらえる。」そう思った。大きく息を吸うと、わたしは口を開いた。

敏子 あのね、この次会ったとき、わたしのこと話すって言ったでしょ？ だから聞いてくれる？ わたしね…。

ナレーション わたしは、自分の家庭のこと、父のこと、母のこと、学校を続けるお金がないこと、そして自殺を図ったことまで、胸のうちにあることを一つ一つ彼に話した。すべてを話し終えた時、ずっと心が軽くなった。何か、頑丈なロープのようなもので、グルグル巻きにされていた心が、解き放たれたと思った瞬間、わたしの体は温かい感触に包まれた。何も言わず、しっかりと抱き締めてくれた彼の腕の中に、わたしはいたのだ。

義也 君の話を聞いて、内心驚いてた。君が自殺しようとしたあの夜、あの時間、僕は特に「君のために祈らなきゃ」という強い衝動に駆られて、一生懸命祈っていたんだ。

ナレーション わたしには、祈りの力など分からなかった。でも心の中は、なぜか「やっぱり、そうだったんだ」という、うれしさに似た思いに包まれていた。

敏子 神様は、祈れば、必要なお金も与えてくれるの？

義也 ああ、本当に必要なものなら、必ず与えてくださる。でも君の場合は、お金もそうだけど、まずお父さん、お母さんに対する自分の気持ちを神様に解決していただくことのほうが、もっと大切じゃないかな。石塚さん…。

敏子 「とっち」って呼んで。

義也 じゃ、とっち。一度教会においでよ。今度は日曜日の朝、神様の前でデートしよう。

ナレーション こうしてわたしは、1週間後の日曜日、一生に一度も行くことはないだろうと思っていた、キリスト教の教会に足を踏み入れた。

(効果音) (賛美歌)

藤崎牧師 初めまして。牧師をしております藤崎です。よくいらっしやいました。前田君に聞いて、お会いできるのを楽しみにしておりましたよ。

ナレーション それから、藤崎牧師は、わたしの悩みを一部始終、じっくりと聞いてくれた。

牧師 わたしがすばらしいと思うのはね、石塚さん。あなたがご自分の気持ちを冷静に見詰めて、自殺しようと思えなかった苦しみの本当の原因がどこにあるか、分かっておられるということです。

敏子 本当の原因ですか？

牧師 ええ。それはお金そのものじゃなくて、ご両親へのお気持ちですよ。長い間、心の中にわだかまっていた、お父さん、お母さんへの憎しみ、許せない心。でもそれは、あなたのお二人へのとっても深い愛の裏返しなんだよね。

敏子 …そうかもしれません。

ナレーション 藤崎牧師は、聖書を開きながら、わたしの心の中を、手に取るように整理してくれた。そして、愛したいのに、どうしても自分の受けた心の傷の深さを見つめて、憎んでしまう思いが、自己中心の「罪」であること、その罪を、丸ごと背負って十字架で死んでくださったイエス・キリストを信じれば、罪を許され、人を愛する力を与えられることを、静かに話してくれた。

敏子 わたしはその夜、思い切って母に電話をした。

敏子 あの…お母さん？ どうしても学費が足りないの。貸してもらえないかなあ。

ナレーション 電話の母は泣いていた。わたしは、これで1つ心の壁を乗り越えたと思った。うれしくて前田君に電話すると、彼は飛んできてくれた。

義也 よかったねえ、とっち。君のうちにいるイエス様がその力をくださったんだよ。今度はお父さんのために祈ろうね。

ナレーション わたしたちは、公園のヒノキの下に立ち、空を見上げた。その夜も、すべてを知っているかのように、ヒノキは静かに枝をそよがせていた。

(完)